

12. 南市東遺跡出土の へら記号の弥生式土器



1

1977年3月、南市東遺跡第3次発掘調査において、いわゆるへらによる記号的文様を施した弥生式土器の出土を見た。南市東遺跡は、湖西線の開通に伴い、水田地帯であった安曇川駅前の土地区画整理事業の際に、東部地区における街路築造工事現場で多量の土器が発見され、これが契機で関係者の認識するところとなっ

た。第3次調査の対象地点は、東部土地区画整理地区の中央を、国道161号線と安曇川駅、さらに西部土地区画整理地区とを結ぶ幅18mの重要幹線にあたるため、工事に先立って試掘調査を行い、遺構の確認された範囲のうち500m²に限って発掘調査を実施した。

検出された遺構は、3棟の竪穴住居跡とピット群、3条の溝であって、へらによる記号的文様の弥生式土器は、溝IIの北端より出土した。

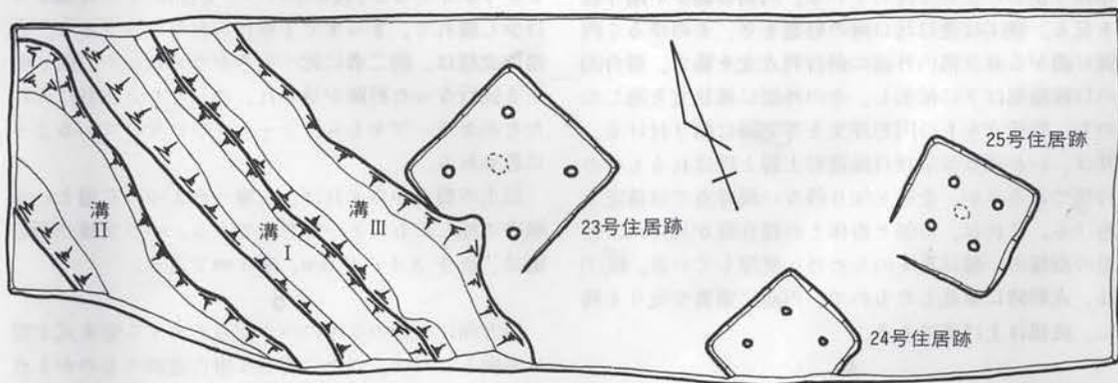
2

3条の溝は、鉄分まじりの地山(黄色粘質土)を掘り込んで造られたもので、溝Iと溝IIからはコンテナ12箱分の量の土器が出土し、これらの土器の内容から判断すると、ほぼ同じ時期に存在し、埋没してしまったようである。溝IIIからの遺物の出土は皆無に等しく、溝Iの東肩および23号竪穴住居跡の一面を破壊していることから、比較的新しい溝であることがわかる。

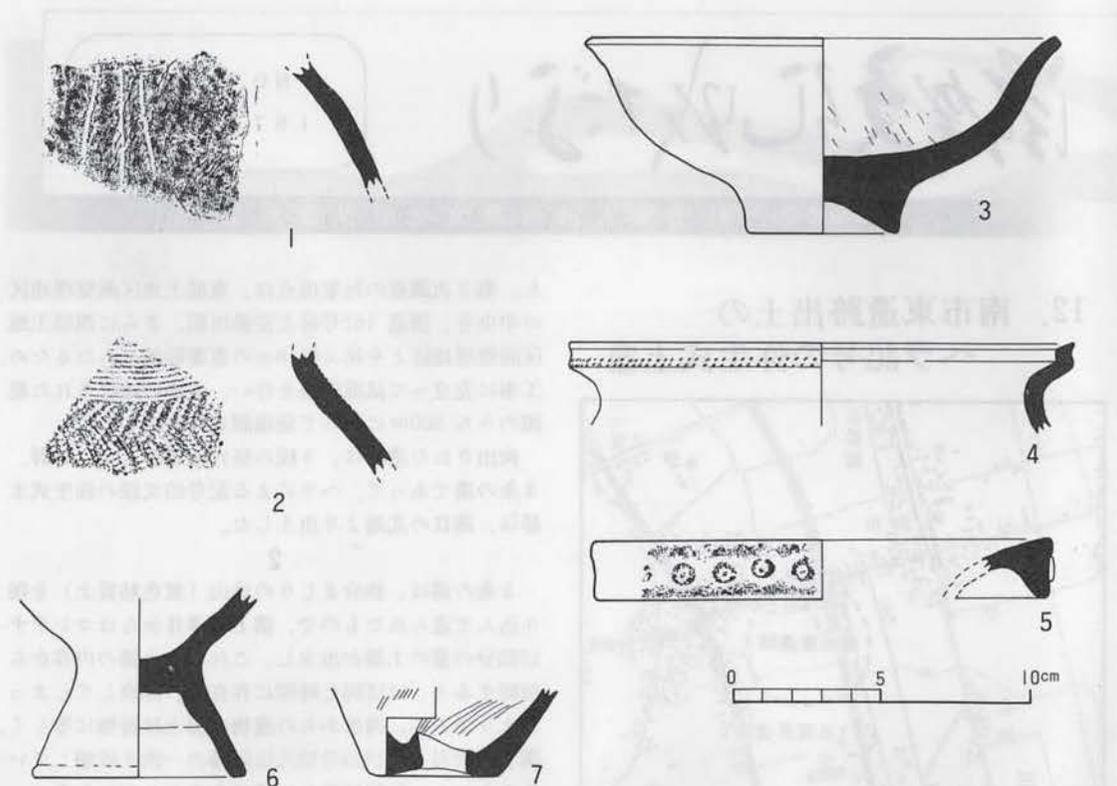
溝I・IIの堆積層序は、基本的に上下2層に分かつことができ、上層は青灰色と暗茶褐色の砂層で、遺物はこの層中から出土したものであり、下層は灰色礫層で遺物の出土は見なかった。溝IIの上層は最深部で60cmを測る。なお、溝IIの幅は3.5~4mである。

3

溝I・IIにおける主な遺物は次の通りである。まず、挿図に掲載した弥生式土器がもっとも古い時期のものにあたり、量はわずかである。土師器では、口縁端部の内面を帯状に肥厚した甕、また小型丸底壺や手づくね技法によるミニチュア土器、高杯等があり、須恵器



第3次発掘調査遺構平面図



溝 I・II 出土弥生式土器

では、格子叩き目文を外面に施した甕、天井部が扁平で口縁部との境界が鋭い稜をなした杯蓋等がある。

このように、時代を異にする土器が、同一層位に含まれていたわけである。

そこで次に、弥生式土器を観察してみよう。(挿図)

壺(2)の肩部には、櫛状工具使用の直線文、その下に左下りと右下りの斜行列点文を施す。内面はナデにて粗雑に整形する。鉢(3)の口縁部はゆるく外反し、端部は角張っておさめている。底部には高台状のものが粗雑な整形によって付いている。内面は細かい削り痕を見る。甕(4)は受口状口縁の形態をし、そのゆるく内側に曲がる直立部の外面に斜行列点文を施す。器台(5)の口縁端部は下に拡張し、その外面に波状文を施したのち、竹管文をもつ円形浮文を等間隔に貼り付ける。(6)は、いわゆる S 字状口縁甕形土器と呼ばれるものの台部であろうが、全形を知り得ない現時点では確定を避ける。これは、台部と器体との接合痕が見られ、台部の裾端の一部は重圧のため外へ肥厚している。甗(7)は、成形時に穿孔したもので、内面に顕著な反りを残し、底部は上げ底である。

4

さて、ヘラによる記号的文様は、壺(1)の頸部から肩部に移る部分にあたり、土器片の測定値は縦 3～5.5

cm、横 7 cm、厚さ 0.5 cm である。灰黄色を呈し、表面にハケ目調整を施し、内面にナデを行う。胎土には 5 mm 程度の小石が含まれているが、主に細かい石英砂粒であって、まれに金雲母も混じる。

3本のヘラ記号的文様が、いかなる順序で施されたかは一概に決定し難いが、ちょうどヘラの記号的文様が何ら欠けることのない良好な資料であるので、若干言及してみる。左端のヘラ文様は、その上端が土器のくびれ部に接し、一気に上からまっすぐに入れた力強さがうかがえるが、真ん中のヘラ文様は、くびれ部からは少し離れて、まっすぐ丁寧に入れたようである。右端の文様は、前二者に比べ長さがやや短かく、同じ所を2回行なった形跡が見られ、ゆっくりと太目に入れたためかカーブをもち、シャープさに欠けているように思われる。

以上の観点からすれば、左端→真ん中→右端という順序で施したものと一応想定できる。ヘラ文様の測定値は、長さ 3.4～3.5 cm、幅 1 mm である。

5

縦方向に平行の3本のヘラ記号を有する弥生式土器の類例としては、つとに著名な唐古遺跡のものが1点あるが、しかし厳密に見ると、南市東遺跡のそれは下にいくに従ってやや開き気味であることに違いが認め

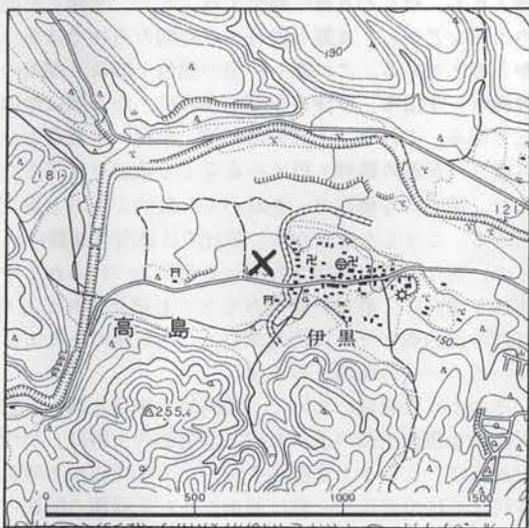
られる。

ところで、本県内において、ヘラ記号的な文様を有する弥生式土器の出土例は、本遺跡以外では、大橋信弥・別所健二・谷口徹3氏の報告になる野洲町久野部遺跡の長頸壺がある（「滋賀文化財だより」第2号）。久野部遺跡のものは、くびれ部の一点から放射状に3本のヘラが派生した記号的な文様である。これと類似したものとしては唐古遺跡をあげることができる。

佐原真氏は、畿内後期の土器が一体化していく中で、

「大和と中南河内・和泉が、伊賀をも含めて、長頸壺とよぶ土器と、記号的な文様の存在とによって、他の地域と区別できる」（『大和川と淀川』『古代の日本』5、近畿）と指摘されるが、今回の、琵琶湖によって隔たった2遺跡からの出土は、近江においても伊賀と同様、畿内と何らかの交流があったことを裏付ける資料を提供したといえるし、さらに今後、本県内における発掘調査の進展いかんでは、いよいよ多くの出土を見ることと思う。（北村 彰）

13. 高島町中ノ坊遺跡 出土の瓦器碗



はじめに

畿内の平安時代後期から鎌倉時代の遺跡を発掘すると、瓦器とよばれているいぶし焼きされた黒灰色の土器が顕著に出土する。瓦器の器形は、碗が大半を占め、他に小碗、小皿などがみられるが、それまでの土器にくらべると、器種はきわめて限定されている。

近年、中世の遺跡や遺物が考古学の調査対象として定着するにつれて、瓦器の実態も明確になってきた。その結果、平安時代の9～10世紀に増加した黒色土器がさらに発達して、瓦器を生み出したことが明らかになってきた。また、稲垣晋也氏や白石太一郎氏によって瓦器碗の編年もなされており、さらに、鎮壇具や土公具に使用された資料などから、その年代観もより具体的なものとなっている。

さて、そのような瓦器の分布を本県下に求めてみると、昭和44年に白石氏の論文中に発表された「瓦器出土遺跡地名表」によれば、大津市延暦寺西塔、同近江国分寺、水口町波濤平古墳の3カ所があげられている。

しかし、8年たった現在、発掘調査の増加にもかかわらず、県下における瓦器の資料はほとんど報告されていない。このことは、近江で畿内同様瓦器が使用されていたのかどうかを、まず根底から検討する必要があることを示している。

現在、確実に瓦器が出土しているといわれているのは、延暦寺だけのようである。しかし、延暦寺のある比叡山は、京と近江にまたがり、寺も両所の文物が入り混っていることは疑うまでもない。それゆえ、諸堂の雑器として、瓦器が京から供給されていたことは十分考えられることである。それ以外の遺跡からの出土資料については、土器が小破片で遺存状態が悪ければ、近江独特の瓦器に似た黒色土器と誤認するおそれが十分ある。したがって、瓦器の完形品かそれに近いもの、あるいは遺存度の良い特長的な部分以外では決め難い場合が多い。

最近、湖南や湖東などで、小破片ながらあるいは瓦器ではないだろうかといわれる土器を、見たり、伝え聞いたりすることがある。しかし、先にも述べたように断定は難しく、また仮に瓦器であったにしても、共伴する同時期の土器の割合からみれば、きわめてわずかな量である。

瓦器の新資料

このような状況の中で、明らかに瓦器であるといえる遺物が、高島郡高島町中ノ坊遺跡から出土した。この遺跡は、鴨川上流の伊黒に所在し、河岸段丘上に立地している。「中ノ坊」の字名が示すように、寺院跡が推定されているが、地表に基壇や礎石など何も残されていない。

昭和52年10月に、ほ場整備に伴う発掘調査を実施した結果、平安時代中期から鎌倉時代前期頃までの遺物を含む包含層のあることが明らかになった。ただ、遺物は全て同一層中に混在し、層位的には細分できなかった。この中から図示した瓦器が、同一トレンチ内で出土したのである。

① 底部だけしか出土しなかったが、復原すると図のような碗になる。高台の復原径5.6cm。高台は退化して、底部にはりつけられたようなやや雑なつくりで

ある。碗の内面にはへら磨きが残っており、内底面には渦巻状の簡単な暗文が施されている。器壁は薄く、焼きは良く硬質。色調は、内外面とも銀色の光沢をもった黒灰色で、断面に見られる素地は灰白色である。

② 口径 8.0cm、高さ 3.0cm、高台径 3.6cm、高台高さ 0.5cmの小碗である。①とくらべて高台はしっかりとしており、内面のへら磨きも密で、内底面にはジグザグの暗文を施している。また、外面の口縁部付近にも、わずかにへら磨きの跡が残る。つくり、焼成、色調なども①と大差はないが、本例の方がやや光沢がない。

さて、この両者を瓦器の編年に位置づけてみよう。①は、退化しはじめた高台、内面のへら磨きが粗くなり、内底面に単純な渦巻状暗文のみられるなどの特色から、白石編年の第Ⅲ段階の7型式に、また、稲垣編年のI、J型式に比定できる。この型式の瓦器は、奈良県北葛城郡当麻町当麻寺曼荼羅堂の基壇に土公具として埋納されており、寛元元年(1243)の時期が考えられている。こうした点から、本例も13世紀の遺物と理解してよいであろう。②については、碗、小碗、小皿のセット関係が、瓦器碗の粗製化につれて消滅していったとする稲垣氏の指摘があり、①に与えたJ型式の時期ではセット関係は崩れ、もはや碗のみにしぼられる時期といえよう。また、①にくらべて密なへら磨きや、作りのていねいさなど、少くとも①の碗より古い様相を示している。この種の小碗については、稲垣編年でF型式の碗に伴出しており、12世紀代の時期が与えられよう。

以上の検討から、出土した瓦器は同時期のものではないことを知りえたのである。

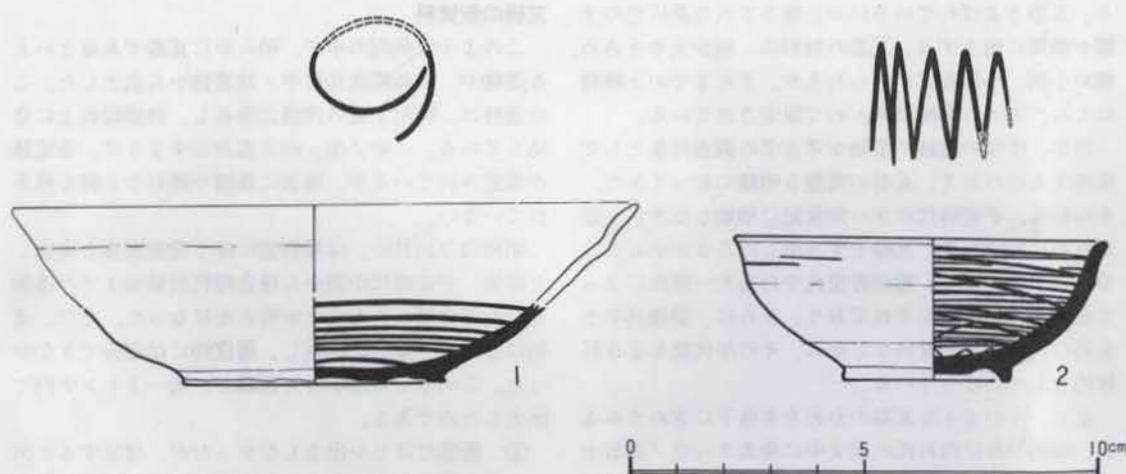
まとめ

中ノ坊遺跡の包含層は、各時期の遺物を含んではい

るが、出土した瓦器の占める割合は、きわめて小さなものである。このことは、瓦器の存在を確認することはできたが、先に予測した瓦器の占める割合については、従来の傾向を否定するものではなかった。少量の瓦器の出土は、瓦器が近江で生産されて消費されているのではなく、畿内から何らかの機会に持ち込まれてきたと推定されはしないだろうか。したがって、近江においては、瓦器碗と同じ機能をはたすものが別に存在したはずである。

昭和49年に調査された、野洲郡野洲町富波遺跡から出土した碗形の土器は、土器の内面と口縁部外面に炭素の吸着した黒色土器A類にあたるが、形態や仕上げ、いぶし方が畿内の黒色土器と異なるものであった。山口辰一氏は、形態の特色、器高指数などが畿内の黒色土器よりも、むしろ瓦器に類似することや、共伴した他の土器などから、瓦器と併行する時期の遺物ではないかと考えている。この新しい型の黒色土器は、湖南の野洲町、守山市、草津市などを中心に、出土例は増加している。このセット関係は、碗、小碗、小皿などから成り、瓦器の器種と似ていることも確認されてきた。また、量的にも豊富で、きわめて一般的なものと考えられる。こうしたことから、近江では畿内の瓦器に代って、別な土器が使用されていたと結論づけられよう。同様な傾向は、最近丹後地方などでも紹介されており、瓦器の流通圏とその周辺地域における土器のあり方についての一つの課題といえよう。

そのような意味において、畿内的な黒色土器、瓦器、近江的な黒色土器の混った中ノ坊遺跡の土器は、整理が進めば、これまで未解決であった平安時代から鎌倉時代にかけて近江で一般に使用された雑器類の問題について、何らかの示唆を与えてくれる楽しみな資料といえよう。(兼康保明)



中ノ坊遺跡出土の瓦器